

サンディエゴの小梨

中嶋嶺雄



日本はぼつぼつ梅の便りのころだろう。アメリカ西海岸最南端のここサンディエゴは、もう初夏のような日差しのもともある。

昔から米海軍の根拠地として知られ、近年は新興の産業・学園都市として発展してきたサンディエゴは、またスケールの大きな海岸線と夕日の美しさでも知られている。コロンブスが新大陸へ上陸してから五十年後にカリフォルニアへ遠征し、この地をスペイン王に献じたというポルトガル人航海者カブリーヨが最初に上陸したロマン岬(Point Loma)は、市の西南端に大きく突き出ている。一月から二月には季節的に移動する小鯨の群れを眼下に目撃できるこの岬の崖の上から、百八十度の視界いっぱい広がる大海原を見てみると、水平線が明らかに湾曲して、地球は本当に丸なのだと思感させられる。

「サンディエゴの小梨」 「GINZA-1993.04.00」
サンディエゴのラ・ホーヤ(La Jolla) 1帯は、アメリカ有数の保養地・高級住宅地であり、日本人に馴染みの深い故E・ライシャワー教授(元駐日大使)は、晩

年この地に移ってここでその生涯を閉じられた。ハル未亡人は現在もお元気で、私は先週、「日本は新しい自己像を必要としている」と題した拙論(『ジャパン・タイムズ』一九九三年一月二十六日付)への強い賛意のお手紙を戴いてたいへんに恐縮した。

このようなサンディエゴは、確かに楽園のような都市に思われるかもしれないが、カリフォルニアン・ブルーの晴天が続く風光明媚な土地柄が、あまりにも健康的、いやスポーツ至上主義的で、人間社会としてはどうも情感に欠けるような気がする。

広大なスペースをもつ私たちの大学は丘陵地の上に広がっていて、私の研究室からも太平洋がよく見える。海の方こうが日本なのだと思いつつ、あかず眺めていることもよくあるけれど、とにかく底抜けに明るいペンキ絵のようなサンディエゴの自然に接していると、私には故郷・松本平の、霜枯れの庭先に残菊が這い、木立ちを透かして遠く北アルプスの銀嶺が望まれるといった佇まいがとても懐か

しくなってくる。

こちらの風景には蒼い海あり、白砂のビーチあり、濃い緑の芝生があり、プーゲンビリアやハイビスカス咲き乱れる赤やピンクの花壇があって、また一步ストリートから外れればキャニオン(谷)あり、デザート(砂漠)あり、赤茶けた地肌の岩山もあるのだが、それらは一見晴れやかで雄大ではあっても、きめのこまやかさに欠け、いまひとつ情緒が感じられない。

*

そのサンディエゴの町中にいま、真っ白い花をつけた樹木があちこちで目立っている。この二月の初旬から一斉に咲き始めたといえようか。私が住むテラスのブルー・サイドにも、近くのシヨッピング・モール脇の街路樹としても咲いている。淡い緑の小さな葉を交えたその五弁の花の様子からして、それがリンゴか梨に近い樹木であることは、信州育ちの私にはすぐ察することができただけで、その名前が分からない。

こんなに目立って鮮やかに咲いているのだから土地の人はみな知っているだろうと尋ねたのだが、驚いたことに誰も知らないのである。私のクラスに出ている大学院生たちももちろん知らない。フアカルティ・クラブで同僚と昼食をした帰り道に、その見事な大木が満開だったので尋ねてみたのだが、国際的にたいそう著名な学者を含む当地の大学教授連もまったく知らないという。

いささか執念深くなった私がついにそ

の名を知ったのは、三十キロも離れた郊外の日本料亭に働く女性が、花の名前を知っているという別の日本人女性を紹介してくれたからであり、彼女によると、それは Spanish Pear (スペイン梨)とらわれるようだ、とのことであつた。彼女の説明によると、花だけで実の成らない梨だという。つまり果物としての梨は実らない花だけの梨の木だという意味であり、私はそれでも十分に納得することができた。本当は一センチにも満たない小さな実が成るはずなのだが、これはもうズミの木、ズミの花の一種であることに間違いない。この花なら私にも自信がある。

ズミはコリンゴとも呼ばれてリンゴの台木にするばかりか、似た名前でも私の松本の山荘にもあるズミの木が甘くて淡い細長の桜桃のような実をつけるのに、ズミの実は酸っぱくて、それで「酸実」つまりズミになったというように記憶している。もともと、樹皮を黄色の染料に用いたところから、「染み」がズミになつたとの説もあるようだが、それよりもなによりも、ズミは信州では小梨と呼び慣わされているのだ。

永く北アルプスに登っている私にとつて、落葉松や化粧柳が芽吹く六月の中ごろ、上高地の小梨平に咲く可憐な白い花がどれほど若き日の心の悶えを癒してくれたことか。八ヶ岳の赤岳の東山麓、八ヶ岳高原ロッジの上手の小梨の大木も忘れ難く、実に見事に咲き誇る。私は日本での多忙なスケジュールを縫って、たま

た去年の六月十四、十五日に久しぶりに小梨平へテントを張った。雨だと聞いた天気予報とは大違いで梅雨晴れの高地は一点の曇もなく、梓川を隔てて眼前に聳える穂高連峰のあの嶺この嶺を懐かしく眺めていたのだが、同時に満開の小梨の花があまりにも綺麗だったので、河童橋のたもとのをカメラにおさめ、残雪の穂高をバックにしたこの一枚の写真だけをダイアリーに挟んで今回こちらに持ってきていた。

そこで改めてサンディエゴの Spanish Pear と比べてみたのだが、それは間違もなく小梨、つまりズミの花であった。日本の小梨はどちらかというと冷涼な亜高地に育つのだから、正確には小梨の一種というべきかもしれない。

それにしてもアメリカの人々は、町中をこんなに美しく彩って咲いているこの花の名前にもまったく無関心で生活しているのだろうか。これからは郊外の砂漠にワイルド・フラワーが咲き乱れるところになるけれど、その場合にもワイルド・フラワーというだけで、いちいち花の種類や名前には関心がないらしい。一般に花といえば、ローズとかリリーとかチューリップとか、そういった花の名前ぐらしか知らないらしいのだ。

きょうはバレンタイン・デーの日曜



(中嶋 崇雄氏)

日。私はこの原稿をこま
で書いてき
て、ひと休み
するつもりで

テラスのブルーへ泳ぎに行った。七十歳前後のいかにも年金生活者らしい老人が二人、ブルー・サイドの温水池につかって大声で健康談議に耽^かっている。ひと泳ぎしてから私も仲間に入れてもらって話している、そのうちの一人は米軍兵士として日本へ行ったことがあり、仙台、秋田、新潟にいたことがあって、日本は素晴らしい思い出という。

帰り際に私は念のためと思って、目の前に咲く白い花はなにかと尋ねてみると、初めて花の存在に気づいたらしく、
It's beautiful! といっただけから、チェリーではなにか、という。私はそれが Spanish Pear であり、日本にも同種のものがあると説明すると、彼はいかにも感心したように頷いてから、「貴方はナチュラルリストか？」と聞かれたのには、閉口してしまった。

私はアメリカへは毎年のように来ていたけれど、こちらに住み、こちらの大学で教えて給料をもらいながら、アメリカ社会を眺めていると、当然のことながら、これまでには見えなかったさまざまな断面が見えてくる。

今回のサンディエゴの白い花をめぐる私にとっての小さなドラマは、どこへ行っても同じようなファースト・フード (fast food) ばかりが流行しているアメリカ社会と、どこか共通するものがあるように思われてならない。

(カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院
客員教授)